

【史料紹介】伊賀者由緒書

山田雄司

「伊賀者由緒書」は国立公文書館内閣文庫所蔵の写本で、全一四丁からなる。奥書には宝暦十一年（一七六一）九月に写されたことが記されている。前半は「伊賀之者御由緒之覚書」後半は「伊賀之者先祖筋目并 御家^正奉服候謂申伝候趣、左之通御座候」として、両者とも伊賀者の由緒が記されており、それぞれ別のものを同一人が書写して一冊にしている。

内容は、服部半蔵ら伊賀者が「神君伊賀越」の際に家康を助けて以来、種々の戦において家康に仕えたことにより、家康からの信望が厚く、江戸の地を拝領したことが記される。由緒書によれば、伊賀者は敵城へのしのびを得意とし、その見立を報告することによって敵城を攻略する一助としていたことがわかる。

二〇一二年度ハイトピア伊賀において開催した三重大学伊賀連携フィールド伊賀忍者古文書講座において解説を進めた成果として、その翻刻を掲載する。

伊賀者由緒書 全

伊賀之者御由緒之覚書

一、天正十壬午年五月廿一日、信長公仰^ニ依て、
権現様甲州穴山梅雪御同道被為^ニ遊、江州安土・京都被為入、夫・大坂^正被為入、同廿九日泉州堺為^ニ御見物、彼地^正御越被為^ニ遊候刻、同六月二日明智日向守光秀企逆心、京都於本能寺信長公御父子御生害被遊候由、茶屋四郎次郎奉告により、小勢^正本道ハ如何と被為^ニ思召、伊賀越を被為遊候積り御相談被為遊候処、梅雪何とか被存御跡に残り被申上処、大和之内^正一揆共^ニ被取籠、穴山殿ハ被討被申候、扱権現様伊賀越を被為遊候^ニ付、罷出御味方可申上旨、服部半蔵方告知らせ候^ニ付、伊賀之者共罷出、鹿伏兔山路御案内申上、勢州白子追御供申上、夫・御船^正被為^ニ召、参州^正御帰城被為^ニ遊候事、
一、同年六月十四日、京都為^ニ御進発、尾州鳴海^正御発向被為遊候刻、勢州白子追御供申上候、伊賀之者共鳴海^正御出迎奉り、御出馬之御供可仕旨申上候処、甚御感被為^ニ思召、同十五日不殘、御家^正被^ニ召出、服部半蔵同仲手^正属可申旨被仰渡候事、
一、同年伊豆国韮山押として天神ヶ尾と申寄^ニ服部半蔵罷在、伊賀之者共半蔵手^正属韮山表^正昼夜之働仕、同国佐野小屋と申寄に敵兵数多楯籠罷在候を、松平周防守差引を以、九月八日之夜伊賀之者兩人忍入、案内を見立候処に、敵兵よりも忍幡に伏相伺候といへ共、忍幡を越小屋之要害を具に見立、九月廿五日之夜右兩人之者味方を手引仕、佐野小屋を乗取申候、服部権大夫同与十郎駈来て相働高名致申上、松平周防守牧野新十郎御助手として被参下知有之候、信玄勝頼二代ニも落不申小屋、則時乗取之由、

権現様甚 御感被為 遊候、右働之趣、周防守新十郎家中之者共具ニ存候事、

一、同年十二月十一日、甲州絵草と申告に敵数多楯籠有之候を、服部半藏被 仰付伊賀之者忍入案内見立、味方を手引いたし責落し候事、

一、同十一月未年、甲州屋村之城を服部半藏被仰付、伊賀之者共八月・十二月迄在陣仕候、同仲ハ岩殿之城ニ在陣仕候事、

一、同十二月申年伊勢松ヶ島之城ニ瀧川三郎兵衛其外大勢籠城仕罷在候節、寄手ニ筒井順慶・織田上野介其外数多寄来り候節、御加勢として

尾州・日置大膳亮、三州より服部半藏伊賀之者共其外鉄炮之足輕共被差遣候節、たやすく城中ニ入籠城仕候、寄手四万余ニ三月六日より四月末迄四十余日責候得共、落城不仕候、此時伊賀之者共数多討死仕

候、松ヶ島和談ニ罷成、夫より尾州清洲ニ在陣仕候事、

一、同年長久手御陣之節、三州岡崎におゐて伊賀之者共大勢被仰付、秀吉公并池田勝入(宿願)・森武藏守等之陣所ニ忍入、其外陣所近辺忍罷在、

敵中之様子味方江可通之旨被仰付、彼地・罷越御注進申上候、就中三好殿・池田父子・森武藏守其外大勢三州表発向之砌、所々ニ被附置候伊賀之者御陣所江駆帰候て告奉り、御勝利ニ罷成候、右働之次第、長久手

御陣御供之衆中具ニ存候事、

一、同年六月十四日、尾州蟹江之城主前田与十郎御敵申、同十六日之夜瀧川左近将監を引入申候時、急而

権現様密に被 仰合、伊賀之者を被附置敵方・急ニ攻寄候ハ、相図之火を揚御注進申上候様被 仰付候ニ付、二三所ニ火を揚急に駆帰候節、

早

権現様御出馬被為 遊、途中ニ右之次第を言上申上候、敵方之勢共未

なかはハ船中ニ有之候を、伊賀之者共大勢駆来て船中之敵方攻合、瀧川か兵船共を押多人数を城へ入不申候処、船中戦負て船を漕退申候、

同十八日服部半藏伊賀之者共井伊兵部少輔手ニ有て井伊殿家中取合仕候を、伊賀之者共急ニ小服・押破候所を、井伊殿下知有之、伊賀之者共

井伊殿衆を一所ニ二丸迄攻入申候節、井伊殿衆数多討死有之候、伊賀之者共本丸櫓下江附申候時、半藏甥服部源兵衛を初伊賀之者共討死仕候を、

権現様 上覽被為遊御下知有之、鉄之楯三拾枚被下、弥相働申候、瀧川降参仕、蟹江之大将前田与十郎ニ切腹為致落城仕候、夫、勢州神戸へ

御出馬之節御供仕、薬王寺と申所に敵数多楯籠罷在候を、権現様御馬先ニ追落し攻落申候事、

一、同十三酉年閏八月、真田安房守心啓申候時、

権現様 御下知ニ甲州千塚と申所ニ陣取罷在候事、

一、同十八寅年七月、小田原御陣之御供申上候事、

一、同年江府 御入国之節御供申上候事、

一、同十九卯年九月奥州御陣之御供仕候事、

一、文禄元辰年高麗御陣之節御供仕候事、

一、慶長五辰年関ヶ原御陣之節、上杉景勝御押として宇都宮ニ結城中

納言様被成御座候節、岡部内膳・皆川山城守・服部半藏等罷在候、其

砌敵地白川之城案内見立ニ奈須所之者共度々被遣候得共、老人も帰不

申候所、伊賀之者之内三人被仰付、白川之城案内見立ニ罷越申候時、

彼二人之者共案内具ニ見立帰申候、最初罷越候奈須之者ハ白川之城大

手口ニはたもの上り罷在候をも、彼等三人見申候て罷帰候、則三人之

者共案内いたし攻入候ハ、白川之城即時乗取可申由、結城様江服

部半蔵申上候得者、無殘所働_レ候得共、上方御勝利_ニ成候はず候得者、白川之城取候ても其甲斐なく、上方御取合之様子_ニより候はんと御意被成候間、差置申候、此趣者岡部内膳・皆川山城守・奈須之者共具_ニ存候事、

一、同十九寅年翌卯年、大坂両度之御陣之節御供仕候、此節伊賀之者共夏冬御陣共御密事を以大坂城中又は敵中諸手_ニ被在之外、国々_ニ被罷越御密事御用相勤候、正而御密事之儀_ニ付、勤方之儀書図等無御座候事、

一、伊賀之者天正十年六月十五日、尾州鳴海_ニおゐて被召出候共を忍之者伊賀之者と申候、此者共御入国之後年寄候者御奥御屋敷御番被仰付、年若成者共ハ無役_ニ忍之儀御用相勤申候、子孫今以無役_ニ罷在明御殿又者御用明屋敷等有之節、御番相勤申候、

一、於參州服部半蔵同仲_ニ被仰付、伊賀之者之一類共追々被召出、右兩人組同心_ニ被仰付候、是等を往古伊賀同心と申候、其後此伊賀同心諸組_ニ割人々入候故、御特御先年組与力同心等之内_ニ此子孫今以有之候、是等之類者惣之者_ニハ無御座候、

一、天正十九卯年十一月伊賀之者_ニ地方_ニ下置候儀者、御陣御在京其外御隱密御用被仰付、国々所々_ニ罷越候節、小身之者留守中妻子等安隱可仕ため、居屋敷近所_ニ村数七ヶ村永楽千貫文之地方被下置、子孫今以拝領仕来候事、

一、右地方之内、武州新座郡上白子村被下置之儀、往古伊賀路山越御案内申上、勢州白子辻御見送申上候節之御由緒御好身を以被召出候儀、子孫おゐて忘却不仕為難有思召を以、此式ヶ村下置候由古来申伝候事、伊賀之者拝領屋敷之様於往古御入国之砌、御城西御裏御要

害として、服部半蔵同仲被差置、右屋敷左右南北伊賀町と唱、伊賀之者共被差置之処、御内郭出来_ニ付半蔵屋敷ハ半蔵御門相成、北伊賀町之儀者四ッ谷御門相成、右御門外左右_ニ御引移被下置、四谷南北伊賀町と唱、伊賀之者子孫今以住居仕候、

一、伊賀之者共天正十壬午年、大坂御陣迄御陣御在京之御供仕、其外御陣中之御隱密之御大切正路_ニ相勤候_ニ付、御取立可被下置旨、難有上意被下置、返々子孫御取立御加増等被下置御旗本_ニ被仰付候者共数多御坐候、往古伊賀之者とも御密事御用向相勤候儀、昔ハ右之外_ニ書物等難頭儀共数多御坐候様_ニ御座候、

右伊賀之者先祖御奉公申上候趣、右之通_ニ御座候、以上、

伊賀之者先祖筋目并御家_ニ奉服候謂申伝候趣、左之通御座候、

一、伊賀之郷士共先祖之儀者、昔平家之一族弥平兵衛尉宗清、平治年中尾州_ニおゐて頼朝公を奉補、既_ニ死刑_ニ及給ふ処を、宗清足を奉憐池之禪尼重盛公を以清盛公を奉諫、御命を奉助候謂有之故、平家滅亡之後宗清伊賀国_ニ塾居仕候処、頼朝公御代一統之御時、藤九郎盛長を以伊賀国阿拝郡山田郡を宗清_ニ被下置之、永く宗清閑居之地と定め子孫柘植氏を以称号と仕、夫_ニ子孫数十代伊賀国_ニ住居仕候故、子孫之名跡数多_ニ分れ伊賀国_ニ住居仕候、服部氏之儀者、平家之一族平内左衛門尉家長子孫頼朝公伊賀国おゐて忍免之地を被下置、子孫服部氏を以称号と仕足、又数十代之間伊賀国住居仕候故、子孫名跡数多分れ住居仕

候と申伝候、

一、伊賀之郷士共、

神君江奉服候謂者、永祿年中・天正五年之比迄、郷士共之内三州江罷越
神君江奉仕御旗本被 召出、厚く忍祿を被下置候者共多く有之候故、
何茂羨之 御仁恵を奉慕候、

但服部半蔵儀者永祿八年三州江罷越御家江被召出候と申伝候、然処天
正九年春信長公仰江伊賀国江往古・郷士共押領する事謂なし、攻取可然
由承之、何茂申候江我等共旧領之儀往古先祖頼朝公・忍免之地也、猥
に織田家江可随事如何江付三州江罷越、

徳川大君江申上御下知を奉請、御幕下江奉附安否を可極と一決仕、同年
七月柘植市助兄弟を以

神君江奉告候江、伊賀之郷士共信長公之幕下江奉附事を不思頼給候江、

伊賀国を

大君江奉り麾下江奉属度事を申上候処、

神君之仰江郷士共ハ数代之地也、唯同処江信長江服本領を不可離、時節
を可待、但我等仕ん事を思は、追々三州江可参との 上意也、此事を
柘植兄弟立帰て被召候也、柘植江之丞家筋と申伝候、 仰之趣を申聞候処、郷士挙て思
召之、難有事を奉感何も甚落儀仕候、然に信長公是を被及聞召、甚悪
之思召急江攻入給ふ故、防戦仕候得共、多勢江無勢難叶及敗亡数多討死
仕候、其外之者共数代之旧地捨、何も他国江立退申候、立退候者之内
をも搜出討果給ふ、然ニに三州江立退候者共ハ

神君御憐憫被為遊被隱置何れも御家江被 召出候、扱国中不殘信長公
之御手江入、平和江及候江付、翌十年江至り他国離散仕候者共密江国江歸
り、三州江罷越御歎申上候、何も存罷在候砌、同年六月二日於京都信

長公御父子共御生害之砌、

神君伊賀路山越被為 遊候江付、罷出御味方仕候、案内可申上旨服部
半蔵告知せ候付、郷士共大に悦ひ早速駈付御案内申上、伊勢白子追御
供申上候、

右之趣郷士共伊賀国数代住居仕候処、天正九年信長公国中乱入江付及
敗亡、旧領を捨三州御城下伊勢神官方江州甲賀他州高野山和州辺江立
退申候、其砌父子兄弟共討死仕、名跡断絶仕候者共数多御座候、古来
之様申伝候趣右之通御座候、以上、

宝曆十一巳年九月

(やまだ ゆうじ 三重大学人文学部)